



Title	ドレスデンのペヴスナー：表現主義絵画におけるヨーロッパ中世主義の〈精神〉
Author(s)	近藤, 存志
Citation	デザイン理論. 2017, 69, p. 68-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65024
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ドレスデンのペヴスナー

—— 表現主義絵画におけるヨーロッパ中世主義の〈精神〉 ——

近藤存志／フェリス学院大学

1. はじめに

ニコラウス・ペヴスナー (Sir Nikolaus Pevsner, 1902-1983) の中に生まれた20世紀の芸術動向への研究的関心は、彼がドレスデン絵画館 (Gemäldegalerie, Dresden) に所属していた時期 (1924-1928年) に〈表現主義絵画の世界〉の中に、諸芸術の創造をその信仰表現上の役割・機能のゆえに重視したヨーロッパ中世主義の〈精神〉に通じる〈芸術創造のエネルギー〉の働きを感じ取ったことによって深化したと思われる。

2. ペヴスナー、ドレスデンへ

1924年、ペヴスナーはライプツィヒ大学より博士号を取得した後、ドレスデンの絵画館に研究ポストを得て、1928年までその地を研究と執筆の活動拠点にした。ドレスデンにおいてペヴスナーは、1926年夏に開催されることになっていた国際芸術展 (Internationale Kunstausstellung) の企画・運営に従事しながら、ルネサンス美術およびマニエリスム絵画に関する研究と執筆活動を展開した。さらに彼はドレスデンの地で人間の内的・精神的世界を深層抉出的に「表現」しようとする芸術的〈機能〉を徹底的に追求した表現主義絵画にも新たに研究的関心を向けるようになった。ドレスデンは表現主義の絵画運動「ブリュッケ」 (Die Brücke) の結成の地であり、モダン・アートとモダン・デザインの先進都市でもあった。建築の分野では、ハインリヒ・テセナウ (Heinrich Tessenow, 1876-1950) が1920年から1926年までドレスデン芸術アカデミーの建築教授を務めていた。

3. ティリッヒ、ビーネルト、ポッセ、ペヴ

スナー、そして表現主義の画家たち

ペヴスナーが表現主義の絵画に関心をもった頃のドレスデンでは、気鋭の神学者パウ・ティリッヒ (Paul Tillich, 1886-1965) がドレスデン工科大学人文科学部の哲学および宗教学の教授として活躍していた。ティリッヒはモダン・デザインを好み、とりわけ表現主義的芸術を真の宗教的芸術表現のあるべき「形式」として高く評価していた。1926年、ドレスデンで教鞭をとっていた時期に書かれた『現在の宗教的状况』 (*Die religiöse Lage der Gegenwart*) の中で、ティリッヒは「造形芸術」を主題として扱い、「表現主義」について「ここには、古代の芸術におけるごとく彼岸の世界が描かれているのではないが、自己をこえて彼岸へと向かう事物の内的な超出が描かれている。……ブルジョワ社会の宗教芸術は、伝統的なもろもろの宗教的象徴をブルジョワ的道德性の水準に引き落とし、それら象徴からその超越と sacramental 的性格とを剥奪する。それに対して表現派は、その素材の選択はまったく別にしても、それ自体としてある神話的、宗教的性格をもっている」と主張した。表現主義の芸術創造に非世俗的な芸術の性質——宗教的芸術表現としての可能性——をティリッヒは見たのである。

ティリッヒの芸術論は、ドレスデンで有名な芸術収集家であったイーダ・ビーネルト (Ida Bienert, 1870-1965) らを介して、ドレスデンの知識人、富裕層、芸術家たちに広く紹介された。ドレスデン時代のペヴスナーの上司であり後見人でもあったドレスデン絵画館館長ハンス・ポッセ (Hans Posse, 1879-1942)

もビーネルトと親交があった。ビーネルトは、ペヴスナーが企画・運営に従事した国際芸術展の担当委員会の面々に対して一程の影響力を有していたことが知られている。ドレスデンに当時あった表現主義絵画を含む20世紀芸術への広範な社会的関心、とりわけティリッヒやビーネルトらを中心とした芸術愛好家たちの美的趣味や関心、そして知的富裕層の間で盛んに行われていた最新の芸術趣味に関する議論や新しい芸術の創造を支援する機運が、まだ20代前半であった青年ペヴスナーに多様な着想と刺激を与えた可能性はきわめて高い。ドレスデンに移り住んでもなくペヴスナーは、日刊紙「ドレスデン報」(*Dresdner Anzeiger*)に芸術批評を寄稿するようになり、表現主義芸術の絵画作品や芸術家たちを、歓迎すべき同時代的芸術の試みとして、かなり意識的に紹介するようになった。そうしたペヴスナーの芸術批評も、当時のドレスデンの知的富裕層の知的・文化的ニーズに敏感に応えるものであったと言えよう。

また、ペヴスナーはドレスデンの地において、国際芸術展の企画・運営に携わることで、そしてビーネルトらの知的芸術愛好家たちとの交わりを得たことで、表現主義の画家たちとも実際に知り合う機会を得た。

4. 表現主義絵画におけるヨーロッパ中世主義の〈精神〉

ドレスデンでの表現主義芸術との出会いは、ペヴスナーに20世紀の芸術的営みの芸術史的価値を確信させる重要な経験になった。

ペヴスナーは、表現主義の絵画に〈時代を超越〉する〈宗教性の表現〉を見出すとともに、表現主義絵画を描いた画家たちの芸術創造姿勢と中世の芸術家たちの生き様との間に、似通った〈精神〉の働きを感じ取って、何世紀にもわたる時間的隔たりのある表現主義絵画と中世ヨーロッパの芸術の間に〈芸術創造

の動機をめぐる近似性〉を認識し、強調した。ペヴスナーは、中世社会においてはキリスト教信仰が芸術創造の世界をあまねく支配していたとある意味独断的に信じ、表現主義の絵画に、そうした〈神律的社会〉における芸術創造の営み——それは芸術におけるヨーロッパ中世主義の〈精神〉の実践と表現することができよう——が、20世紀芸術においても実践し得ることを確認することができたようである。それゆえ彼は、ドイツ中世後期の精神に深く通じる「情熱的な信仰」をもっていたドイツにおける〈中世の秋〉の画家たち(デューラー、グリューネヴァルト)の芸術に具体的に言及しながら、彼らの芸術に認められる「激しさ」や「達成不可能な世界に到達しようとする……恍惚とした、過剰なまでの表現」の20世紀的追求を、われわれは表現主義の絵画に観察することができる、と主張した。ペヴスナーによれば、表現主義の絵画は「中世の巨匠たちが彫り上げた彫像のように時代を超越」し得る芸術であった。

5. おわりに

これまで、ペヴスナーのモダン・デザイン研究は、彼がドレスデン絵画館での仕事を辞めた後、ゲッティンゲン大学で私講師を務めていた時期(1931-1933年)に基本構想が練られたと言われてきた。しかし、ルネサンスからバロック期の建築と絵画を専門としていた青年美術史研究者ペヴスナーに、モダン・デザインを含む20世紀芸術の諸領域に関する芸術史的関心を最初に芽生えさせたのは、ドレスデンに在住していた時期に彼が享受した広範な芸術体験、とりわけ中世の〈神律的社会〉における芸術的営みに通じる芸術創造のモチーフ——芸術におけるヨーロッパ中世主義の〈精神〉——を20世紀初頭の表現主義絵画の世界に見出した、彼自身の実体験であったと思われる。